長崎大学　子どもの心の医療・教育センター　e ラーニング
講師：西野　章子

【言語の評価】

<言語評価の目的>
①子どもの言語特徴を把握する：言語障害の有無・種類・程度、原因
②今後の方針を設定する：訓練の必要性、訓練実施のための情報や資料の収集、訓練効果の判定
家庭で出来る事のアドバイス、園や学校での配慮に関する所見

<言語発達障害の原因>
①聴覚：聴覚障害に伴う言語発達障害
②知能：知的障害に伴う言語障害
③対人相互交渉：自閉症スペクトラム症に伴う言語発達障害

<評価の方法>
・子どもの行動観察
①行動に焦点をあてる　②行動-認知-脳の関係性について考える　③行動は一連の流れの中で起きる
・標準化された検査の施行
①対象児の発達の過程を知る　②対象児の長所（強み）と短所（弱み）を知る　③診断の補助的な役割
・保護者との面談
①主訴　②生育歴　③現在の様子　④質問紙を用いた情報収集

<言語に関する検査>
①国リハ式<S-S 法>言語発達遅滞検査：言語発達の状況を段階的に知る
②LC スケール：言語理解・言語表出・コミュニケーション、これらを総合した能力の評価
③LCSA：学習場面での指導目標の設定に役立つ下位検査別のプロフィールを明らかにする

<特定領域の言語検査>
①語彙力：絵画語彙発達検査（PVT-R)、抽象語理解力テスト
②統語：構文検査
③会話：質問-応答検査
④発声発語：新版構音検査・口蓋裂検査・吃音検査
⑤読み書き能力：改訂版標準読み書きスクリーニング検査（STRAW-R）

<まとめ>
・よりよい支援に繋げるためには、子どもたちが発達段階のどこに位置しているのか、どのような特性を持っているのかを知る必要がある。
・評価は子どもたちが楽によりよく育つための状況を作り上げていく為の指標と言える。
・言語評価が単に「子どものできないところ探し」に終わってしまうことなく、子どもの長所や今後の課題などを見つけ出す未来志向のものであることが重要である。